

カラムジーンの語彙について

丹 辺 文 彦

カラムジーンの文章が、同時代の文筆家に比して極立って平明、流暢で、現代ロシア語との距たりをあまり感じさせないことについては、異論がないものと思われる。このような、カラムジーンの文章のいわば“近代性”は何に由来するものであろうか？ このことを解明するには、彼自身の言語観はもとより、彼の文章表現を、語彙、統語論（シンタックス）の両面から分析し、あるいは彼の思考方法、語感にまで立入って仔細に検討する必要があることはいうまでもない。

たとえば、グロート（Я. К. Грот）は、カラムジーンの文章の特徴を、彼の言文一致への志向にみてつぎのように指摘している。⁽¹⁾

「きわめてすぐれた文学にあっては、文章語と教養ある社会の話し言葉との間にはほとんど差異がないことを念頭におきながら、彼（＝カラムジーン）は、文章語ほどには民衆の言語とかけ離れていないロシアの話し言葉に文章語を近づけるという妥当な考えに到達した。一方話し言葉は新しい概念を表現する十分な手段を提供していなかったため、カラムジーンは、既存の外国語の借用に頼るか、あるいは相応のロシア語を創り出すという手段に訴えることが必要であると考えたのはもっともなことである。」

また一方カラムジーン自身も、ロシア語の「純化」のために結集したシンコーフらのグループに対抗して、一再ならず自己の言語観を述べている。たとえば「何故ロシアには、才能ある文筆家が少ないか？」（Отчего в России мало авторских талантов?）のなかで、自らの文章作法の苦心と見解をつぎのように語っている。⁽²⁾

「文筆家のなすべきこととして、一体何が残っているか？ 表現を考察し、作り出すこと、語彙を選択する最良の方法を探り当てること、古語に何らかの新しい意味を付与し、それらを新しい繋がりの中で提起すること、ただし読者をあざむいて、読者に表現の特異性をかくしおおせるほど巧みにやることであ

る！（中略）……一言にしていえば、フランス語はすっかり書物の中に書いてある（丁度絵画のように、あらゆる色彩とニュアンスをふくめて）のに対して、ロシア語は部分的にしかそうになっていない。フランス人は話す通りに書いているが、ロシア人はまだ多くの事柄について、才能ある人が書くであろうように話さなければならない実情である」。

カラムジーンが当時文章家として名を成したのは、彼のすぐれた才能に負うのみならず、上述のような見識に裏打ちされたものであることを、われわれは知る。

さて小論の目的は、カラムジーンが新しい文体を創り出していくなかで、語彙の選択、創造、旧語の復活再生、外来語の採用などに対してとった方法を明らかにすることである。

1

カラムジーンは新しい概念を表現すべき言葉がないときに、新語を造り、これに当てた。しかし、彼の新語の創造と使用は、さきに彼自身の見解についてみたように、きわめて自然かつ巧妙に行われているので、われわれには識別が困難なばあいも多い。しかし、一方特定のばあいには、新語を意識的に読者の前に提起しようとする試みも行なっている。その典型的な方法は、脚注によって自己の見解を説明し、読者の注意を促すやり方である。

周知のように、“工業”“産業”を意味する *промышленность* は、カラムジーンの新造語とされる語であるが、この語がすでにロシア語の中に定着したのちの使用例としてつぎのような文章をあげることができる。

На всякой улице множество лавок, наполненных товарами. Везде знаки трудолюбия, *промышленности*, изобилия. (Письма русского путешественника, июля 30, 1889 г.)

興味深いのは、この文章に彼が付した脚注である。すなわち、その中で「この語は今やありふれたものになってしまった。実は筆者がこれを最初に用いたのである。」と記している。

同様の例として“達成しうる”“実行できる”の意味をもつ *достижимый* を挙げることができる。現代ロシア語を知るわれわれにとっては、きわめてありふれた形容詞にすぎないこの語も、彼の周到な工夫によるものであることがわかる。下に例をあげよう――

Вопрос: “Какая есть всеобщая цель бытия нашего, равно *достижимая* для мудрых и слабоумных?” — Ответ: “Бытие есть цель бытия. Чувство и радость бытия (*Daseynsfrohheit*) есть цель всего, чего мы искать можем…… (ПРП, Цирих)

上例は、チューリッヒに滞在中のカラムジーンが、かねて傾倒していた哲学者ラファターに会って、一問一答を行なった内容を紹介する一節であって、問答はドイツ語で行われたはずなので、おそらく、ドイツ語の *erreichbar* をロシア語で表現しようとして造り出したものであろう。この部分にも原著者(＝カラムジーン)の脚注があって、「すなわちどの程度まで達成可能かということ。私は類推によって、あえてこの語を使用した。」と書いている。

従来、当時の新造語の多くがカラムジーンの手になるものと言われていたが、18—19世紀の語彙に関する最近のソ連内外の研究がいちじるしく深まり、その実態が明らかになりつつある。それによると、彼の新造語は従来考えられていたほど多いものではなく、量的側面よりも、むしろ彼以前に各界で使用されつつあった語を、文学界に導入、定着させた質的側面に注意が向けられるべきであるとみられるに至っている。

グロートによれば、カラムジーンの新造語として *общественность*, *усовершенствоваться*, *человечный*, *общеполезный* などがあげられているが、⁽³⁾ これらの語中にも検討を要するものがあるかもしれない。ただ、ロシア・アカデミー辞典 (Словарь Академии Российской, СПб, 1806-1822=САР) には、*общеполезный* の項目はあるが、*общественность* の項目はなく、しかもグロートは後者を廃語と指摘しているにもかかわらず、これが現代ロシア語において広く用いられている点に、少なからぬ興味をそそられる。

2

カラムジーンは西欧の風俗、風物などを表わす語もできるだけ取入れる積極性を示している。「ロシア旅行者の手紙」はその内容からしても、西欧の風物、概念の紹介に重点がおかれているので、いきおいこの系統の語が数多く見受けられる。「ユートピア」を紹介した、つぎの件りには、「つまり、“幸わせの王国” モーアの作品」という注がつけられている——

“*Утопия*” будет всегда мечтою доброго сердца или может исполниться не приметным действием времени, посредством медленных, но верных,

безопасных успехов разума, просвещения, воспитания, добрых нравов.
(ПРП, Париж, апреля…… 1790.)

また、ホテル (отель) を紹介した文——

Иметь хорошую комнату в лучшей *отели*, поутру читать разные журналы, газеты, где всегда найдешь что-нибудь интересное, жалкое, смешное, и между тем пить кофе, какого не умеют варить в Германии, ни в Швейцарии; ……—Так я провожу время и доволен. (ПРП, Париж, мая……)

の脚注には、「Hôtel とは、部屋とボーイ以外に何もつかない賃貸の家。コーヒーとお茶は最寄りのコーヒー店から、食事は飲食店から運ばれる」という説明がある。

“歩道”を意味する *тротуар* も、当時のロシア人には理解しにくかったものらしい。すなわち——

Нет другого города столь приятного для пешеходцев, как Лондон: везде подле домов сделаны для них широкие *тротуары*, которые можно назвать намоствами; …… (ПРП, Лондон, июля…1790.)

という風に本文中で付加的に、「(ロシア語では)板張り床(ナモースト)と言えよう」といささか苦しい説明で、逡巡の様子がみられなくもない。

その他「手紙」の中には、“フランス語風”(галлицизм)、“料理店主”(ресторатер)、“お茶入りシロップ”(баваруаз)、“屋根裏部屋”(гренье)、“店員”(клерк)、“ジャガイモ”(потаты) などがある。作品の性格上このような風物の紹介はやむをえないことではあるが、この辺に、ロシア語純化論者シッコーフらに非難される理由があったとも考えられる。

この他に、脚注を使用するのではないが、文中で или, т. е. あるいは——を使用してさりげなく外国語を説明するやり方も彼の好んでとった方法といえよう。以下にそのような例をかかげておく——

Из библиотеки прошел я на славную *террасу, или гульбище*, подле кафедральной церкви, где под тению древних каштановых деревьев в самый жаркий полдень можно наслаждаться прохладой…… (ПРП, Берн, 28 августа.)

Знаете ли, как в просвещенной Женеве обыкновенно зовут его?
Инсектом—для того, что он писал о насекомых! (ПРП, Женева)

3

とはいえ、カラムジーンは外来語を無差別にロシア語に導入しようとしたわけではない。むしろ、外来語を取り入れるにあたっては、慎重かつ十分の配慮をめぐらしているといつてよいであろう。

その端的な例が、この項で述べようとする同意語的類語（ロシア語）と外来語との併用である。一応このようなロシア語を、外来語とほぼ1対1で対応するという意味で、“対応語”と呼んでおこう。

そのもっとも典型的な例は、“自然”を意味する *натура* と *природа* の並行の使用である。周知のように、*натура* は現在、“自然”の意味では廃語となっていて用いられていない。しかし、カラムジーンの作品中、とくに「手紙」の中では、この両語の使用は実に多く、枚挙にいとまのないほどである。彼がこの両語をあるいは交互に、あるいは同一文中で、あるいは若干の間をおいて使用しているのは何故か、という疑問につき当る。グロートもこのことに気づき、きわめて示唆的に数語を費やして言及しているが、筆者はこの問題について別の機会に詳論したので、⁽⁴⁾ ここでは二、三の例をあげ、結論的なことを述べるに止めたい。

一般論としては、外来語が母国語に馴染んでいない場合、対応の母国語と併用して次第に読者の異和感を減らしていくのは、きわめて有効な方法である。カラムジーンが外来語とロシア語の同意語的対応語を用いたとき、上述のことを念頭におきながら、意識的に併用したことは、まず間違いあるまい。

しかし、*натура* と *природа* との使用例に照らすとき、単に読者をして外来語に馴染ませるという意図以上の何かが考えられる。まず同一文中における両語の使用例をみられたい――

Все прочие животные, будучи привязаны к некоторым климатам, не могут выйти из пределов, начертанных им *натурою*, и, умирают, где родятся; но человек, силою могущественной своей, шагает из климата в климат……ищет везде наслаждений и находит их……везде бывает любимым гостем *природы*, повсюду отверзающей для него новые источники удовольствия, везде радуется бытием своим и благославляет свое человечество. (ПРП, Стразбург, августа 6.)

「…自然 (натура) によって定められた限界」, 「自然 (природа) の招かれた客」というこの例だけでは, 両者のニュアンスの差異はかならずしも明確ではない。しかし他の多くの例を検討してみると, ある種の微妙な差異が浮かび上ってくる。

結論的にいえば, натураには超人間的な神的ニュアンスがあり, природаは, 人間生活に包括されるが, 少なくとも人間の生活に親しい環境的なニュアンスを感じさせる。大文字で記した Натура, 女神としてのそれを示すつぎの例は端的にそのことを物語っている――

На монументе Геснеровом изображены Поэзия и *Натура* в виде прекрасных женщин, плачущих над урной.(ПРП, Цирих)

上例のほかに, “記念碑” “記念物” を意味する монумент-памятник の対応語がある。この例も他の機会に論じたことがあるので, 簡単にのべることにする。

この例は, натура-природа ほど多くはないが, それでもかなりの使用例をみることができる。つぎの例は同一文節内で交互に使用されている例である――

На гробе славного поэта Драйдена стоит его бюст с простою надписью: “Иоан Драйден родился в 1632, умер в 1700 году. Герцог Букингам соорудил ему сей *монумент*” ……Подле, как нарочно, вырезана самая пышная эпитафия на *памятнике* стихотворца Кауле (Cowley): “Здесь лежит Пиндар, Гарадий и Virgilий Англии, утеша, красота, удивление веков”, и пр. (ПРП, Вестминстерское аббатство.)

上例は, монумент に対するロシア人読者の抵抗感を緩和するためというよりも, むしろ同語反覆を避けるために, 便宜的に交互に用いられた感じが強い。事実, この両語に限らず, カラムジーンの同意語使用のすべてに, 重大な区別を読みとろうとするのは, 当を得たものとはいえない。しかし, この両語のばあいにも, 重複した意味・内容をふくみながらも, 微妙なニュアンスの区別をみることができる。これまた結論をいうと, монумент には歴史, 軍事, 政治などに関するものが多く, 後世の монументальный⁽⁵⁾ という形容詞を導き出すニュアンスを感じさせる。

(参 考)

上例中 на памятнике стихотворца Кауле とあって, 詩人カウリーが生格にな

っているのは、現代の用法と異なる。この生格による例は *монумент* にもいくつかあって、*Каламजीн* は生格と与格を区別して使っている。すなわち、この両語が *ставить*, *сооружать* などの動詞の補語として用いられるときに、人名を与格においている。*монумент*, *памятник* が与格を伴う現代用法は、この辺りに起源をもつものであろうが、この点同時代の他の文筆家の例を検討することが必要である。

つぎに “草稿” “写本” を意味する *манускрипт-рукопись* の例を示そう

Между греческими *манускриптами* показывают весьма древний список одной Эврипидовой трагедии, проданный в библиотеку бывшим московским профессором Маттеем; за сей *манускрипт*, взял он с курфюрста около 1500 талеров. Спрашивается, где г. Маттей достал сии *рукописи*. (ПРП, Дрезден, 12 июля.)

上例は一見して判るように、特に内容上の区別があって両語を使い分けているのではない。同語反覆を避けた典型的な例とでもいえようか。他の諸例によっても、この両語に特別の意味内容上の区別をみることは困難である。ただ *манускрипт* が現代ロシア語では廃語になっていることに注目したい。

なお、“典型的な人物” “タイプ” “役柄” を意味する *характер-образ* の用例として、つぎのような文章をあげることができる——

Каждая степень людей, каждый возраст, каждая страсть, каждый *характер* говорит……у него (Шекспира) собственным своим языком. Для каждой мысли находит он *образ*, для каждого ощущения……выражение, для каждого движения души……наилучший оборот,……(О Шекспире и его трагедии “Юрий Цезарь”)

образ という語は、4において後述するように、*Каламजीн* の手によって新しい意味が付与され、復活・再生したといわれる語であり、⁽⁶⁾ かつまた現代語においても生命を保っているだけに、興味深い例である。

そのほか、対応して用いられている同意語的類語の例として——*феномен-явление*, *физический-телесный*, *коммерция-торговля*, *ландшафт-вид*, *фигура-образ* (または *вид*), *фамилия-семья*, *эксперимент-опыт*, *руины-развалины* などの例があることを指摘するに止めたい。

4

前項でも触れたように、カラムジーンは新しい概念を表現するのに、外来語、新造語にのみ頼ったわけではない。特に抽象的な概念を表現する語として、従来から存在していたロシア語に新しい意味・内容を付与し、いわばそれらを復活・再生させるという試みに成功していることが注目される。つまり、現代ロシア語において、それらの語の中にはなお生命力を保ち、広く使用されているものが多いのである。前項で *характер* と関連して述べた *образ* もその一つで、他に“情勢”“状況”を意味する *положение*、“発展”“発達”を意味する *развитие* などがある。*развитие* のように現代語において広く使用されている語が、カラムジーンの手によって新しい意味をもったとは意外の感もするが、ちなみにアカデミー辞典(CAP)を参照してみると、項目そのものが欠如している。また、*положение* についていえば、同辞典の同語の項目の 3) で該当する説明がすでになされており、*образ* は 7 つの語義を挙げているが、“人物”“タイプ”に相当する新しい語義説明はなされていない。さて、*развитие* の使用例をあげておこう――

Чему быть трудно, то бывает редко……однако ж бывает,……и чувствительное сердце, живость мыслей, деятельность воображения, вопреки другим явнейшим или ближайшим выгодам, привязывают иногда человека к тихому кабинету и заставляют его находить неизъяснимую прелесть в трудах ума, в *развитии* понятий, в живописи чувств, в украшении языка. (Отчего в России мало авторских талантов?)

む す び

従来、ロシア文章語の確立あるいはロシア語改革におけるカラムジーンの役割を論ずる場合に、語彙的な側面については、彼の手になるとされる新語(ネオロギзм)に主要な注意をむける傾向があった。しかし 18 世紀の語彙に関する研究がすすむにつれて、この点についての根本的な再評価がなされているのが実情である。この点についての Hüttl Worth らの研究の意義は大きく、また Worth の“Foreign Words in Russian”への序文の中で D. Tshizewskij が、「カラムジーンは多くの場合、学界あるいは官界に滲透していた言葉を文学作品に始めて使用したにすぎなかったことが、いまや明らかになった」⁷⁾と指摘しているのは正しいであろう。

とはいえ、カラムジーンの業績は、新語の創造にのみあるのではないことは、

いうまでもない。

すでに見て来たように、カラムジーンは新語の創造のほかに、外来語の導入、それと母国語との併用、廃れかけていたロシア語への新しい意味づけなどの方法を多面的に駆使して、当時としては可能なかぎり、ロシア語の語彙を豊富化し、近代化する上で少なからぬ貢献をしたことは、否定できないであろう。とりわけ、前述の3項において述べたように、外来語を使用するさいにも、できるだけ自然な印象を与えるために、母国語と併用あるいは混用するばかりでなく、そのことによって時には微妙なニュアンスの区別をも試みるなど、行届いた心遣いがみられる。

カラムジーンの業績は、以上のことをもふくめ、なお、庶民の話しことば(простонародная речь)への無理解といった限界性とも合わせて、一層検討を深めなければなるまいが、この点は別の機会に譲りたい。

- 注(1) Я. К. Грот, Карамзин в истории русского литературного языка, 1867, стр. 76.
 (2) Н. М. Карамзин, Избранные сочинения. М.-Л., 1964, т. 2, стр. 185.
 (3) Я. К. Грот, там же, стр. 83—84.
 (4) 丹辺文彦「“ロシア人旅行者の手紙”におけるカラムジーンの同意語の用例について」(「金子幸彦氏退官記念論文集」恒文社一刊行予定—所収).
 (5) Ср.: Словарь церковно-славянского и русского языка, СПб, 1847.
 (6) Ср.: Я. К. Грот, там же.
 (7) Cf.: Hüttl Worth, Foreign Words in Russian, 1963, Foreword.